

令和4年「市民と議会のわがまちトーク」報告書

開催日時	令和4年4月17日(日) 午前10時から11時50分まで
開催場所	中総合会館 4階ホール
テーマ	高齢者の自立と生活支援サービスの充実について
参加市民	24人
出席議員	担当委員会：福祉健康委員会 肝付 隆治、田畑 篤子、伊藤 清美、小杉 悦子、杉島 久敏、鯛 慶一 サポート委員会：市民文教委員会 田村 優樹、伊田 悦子、小谷 繁雄、高橋 秀策、谷川 眞司、仲井 玲子、眞下 隆史

内 容

【概要】

誰一人取り残さず、高齢者が生きがいを持って安心して生活することができる環境、高齢者同士が助け合い、自立できる環境をつくり上げることを目的として、共助による見守りと助け合いの組織を地域に定着させるための方策について、5つのグループに分かれて課題①～③について意見交換を行い、最後に各グループから意見交換の内容を発表した。

課題① 地域に、老人クラブやそれに代わるような組織がない場合
課題② 組織はあるが、実働的ではない場合
課題③ 組織はあるが、組織に入らず孤立している人がいる場合

【各グループの意見交換の内容】

1班

担当議員：(副委員長) 田畑 篤子
参加者数：6人(議員を含む。)

〔課題①について〕

各自がサロンや趣味の会などの活動をしており、老人クラブ以外にはほかの組織があるので特に課題はないという認識がある。

見守りや相互支援については参加グループごとに異なっており、地域

全体を対象として見守りや相互支援を行う組織などは必要と考えるが、つくるにはリーダーの育成が必要である。活動目的に含んでいる老人クラブをつくるよう、行政から働きかけることが必要である。

〔課題②について〕

老人クラブが地域高齢者支援の担い手となっているが、特定の人集まりで活動に限界があり、老人クラブの改革が必要である。60代のアクティブシニアとしての段階をつかって、定年後から自然に入会しやすいように組織をつくり変える。



〔課題③について〕

現状として、孤立した人がないように、他の組織（サロン・民生委員・地域支援サポーター）が支援に入っているが、どうしても孤立をしてしまう人は存在してしまうので、最終的には行政の対応となっており、現状の組織での役割の方や諸団体が入るしかない。

〔まとめ〕

老人クラブの会員を増やすことが必要ではあるが、現状の活動に限界があり改革が必要である。例えば、60歳を超えれば市民全員が登録をして、必ず誰かが誰かの支援をする仕組みをつくる必要がある。各関係機関との横連携に加えて、現状の課題を行政につなげる中間の組織をつくることの提案があった。

2班

担当議員：(委員) 伊藤 清美

参加者数：5人（議員を含む。）



〔課題①について〕

サークル活動についてはつくりやすいが、趣味の範疇を超えない組織であることから、地域の見守り等の役割を担うことに理解を求めることは難しい。また、サークル活動は年齢的に継続が困難になると解散するケースがほとんどであることも一つの要因として存在する。

老人クラブは、地域の見守り等の役割を担っているので、舞鶴市全体を考えた場合、老人クラブをつくり、各地域の住民と老人クラブとの連携を強化することが必要である。

〔課題②について〕

地域ではなかなかまとめる人が育たないため、行政、老人クラブ、自治会が連携することで民生児童委員の負担軽減を図る。また、専門職として培った過去の経験を持つ人材を活かして、地域に貢献できるようにする働きかけが必要である。

〔課題③について〕

「誰一人取り残さない仕組みづくり」においては、個人情報が必要で、その取扱いについては慎重の上にも慎重を期す必要があるが、関係者にどこまで開示することができるのかを検討することも必要である。

民生児童委員が把握している内容において、「個人情報」という扱いで関係者に必要な情報が共有されていない。

例えば、独居者のご家族が舞鶴市以外に住んでいる場合など、事前に情報開示する事柄について了承を得る。

〔まとめ〕

本グループでは過去にそれぞれの立場でご活躍いただき、現在も民生児童委員や老人クラブなどでご活躍いただいていることから、それぞれの課題について把握されていた。し

かしながら、今後のことを考えると組織の担い手づくりでは、遅々として進まない現状から、具体的なリーダーの育成について、計画的に進めることが求められるものとする。

3班

担当議員：(委員) 小杉 悦子

参加者数：6人(議員を含む。)



〔課題①について〕

サロン活動と老人クラブがあるが、サロンは制約がかなり緩く、老人クラブが「サロン de すとれっち」に移行し、老人クラブの加入者が年々減少している。少人数でも地域に老人クラブがあることが重要であり、

老人クラブを存続するための行政の支援については、体制の一本化が必要である。

〔課題②について〕

老人クラブがない町内において子ども食堂の紹介があり、高齢者の参加も可能なので、世代を超えたつながりが広がることに期待をされている。

老人クラブにおいては、会員が減少傾向にあることから、様々な機会に取組の紹介などをしながら活動内容を充実させ、個人的に訪問して会員の拡大を進めている。

行政においては、いろいろな場や機会に地域での活動の紹介を行い、「参加すると楽しいこと、いいことがある」と伝える取組と活動団体間の交流の機会を持つ取組が必要である。

〔課題③について〕

老人クラブに入って活動するのを嫌がり、家族が加入をストップさせることもあり、個別に訪問して話をするしかない。

一人暮らしの男性高齢者などは、お食事会などの取組があると大変誘いやすいし、これまでもその取組で新たに参加する方が出てきた。また、趣味の活動がグループとして活発に行われていることは、加入の機会を増やすことになるため、効果的な取組となる。

〔まとめ〕

参加者の問題意識がはっきりしており、高齢者の集まりの必要性、楽しい取組の工夫、補助金の在り方など多岐に渡って意見交換ができた。

行政に対しては、今ある老人会や「サロン de すとれっち」などに対して、どのように支援を継続してもらうのか、年に一度だけでも日帰りの団体旅行に行けるようバスを出してほしい、会員1人に対してだけでなく、物での支援にしてほしい、時代にあった補助の工夫をしてほしい、「お食事会」などにも活用できるようにしてほしいなどの要望があり、それぞれの実情に合った支援の方法を考えることが必要と思った。

組織がないところはリーダーの養成が必要であるし、子ども食堂や自治会の力を借りて、自治会活動の一部としての位置付けでもよいのではないかと感じた。

4班

担当議員：(委員) 杉島 久敏

参加者数：6人(議員を含む。)

〔課題①について〕

地域全体を対象とする組織としては、老人クラブをつくるのが一番であるが、クラブを立ち上げる中心的存在が不在であり、役員になる人員の確保も困難であることから、リーダーとなる人材の育成が必要である。



行政においては、地域で活動できるリーダー養成講座の開催や定年となり比較的時間に余裕のある方などを対象にした講座形式の定期的な集会を行うなど、養成のための取組が必要である。

金銭的な負担や役員としての責任的負担がないという理由から、老人クラブではなく、見守りや相互支援を担っていない体操教室などへ参加・加入する高齢者が増えている。また、活動拠点となる十分な広さの会場が確保できないことや徒歩で行ける範囲内に会場がないことも原因となっている。

行政としては、高齢化に対し、若い世代(60歳代)の加入者の増加を図り、老人クラブの継続につなげる取組が必要である。

〔課題②について〕

老人クラブの運営とともに徐々に男性会員の参加率が低下し、次第に女性任せになる傾向がある。対策として地域における避難訓練の開催や活動を行い、高齢者が参加できる機会を設けることや役員として活動できる人材の育成を進めることが必要である。

〔課題③について〕

個別支援計画に基づく、声掛け、コミュニケーションづくりや孤独死の実例などを踏まえて、チラシや回覧板だけでなく、積極的に人間関係を築けるよう「気に掛ける、ことに努める」ことが必要である。

〔まとめ〕

「老人」「高齢者」「シルバー」と呼ばれることに抵抗があり、地域に中心的存在がいないことから、クラブの存続や継続が困難となっている。また、地域差もあるが新規に転入してこられた方や若い世代が自治会(町内会)に入会しないことから、互助・共助の部分が希薄になり、老人クラブが形成できないなどの問題がある。

ともかく、地域で中心的存在となる人材が欠如していることが大きな課題となっているようである。また、老人クラブに代わる「体操教室」などがあり、役員などを押し付けられるような煩わしさが少ないことから、こちらへの参加を選ぶ高齢者が多いようである。

5班

担当議員：(委員) 鯛 慶一

参加者数：6人(議員を含む。)

〔課題①について〕

老人クラブをつくることが必要であり、行政との連携を図るとともに、老人クラブの運営内容の周知と老人クラブの必要性についての啓発活動が必要である。また、提出書類などの事務手続については、高齢者でも管理できるように簡素化するべきである。



〔課題②について〕

老人クラブの組織的活動においてまちなかが良いが、辺縁地区では集会所までの移動が困難であり、移動についての支援が必要である。また、地域住民と老人クラブとの連携強化で地域全体の見守りができるよう、行政による働きかけが必要である。

〔課題③について〕

住民の中にはみんなで集まることが嫌いで一人が好きな方もいる。普段から女性は近所付き合いがあるが、男性にはないという地域もあると思うので、最初は男性だけの集会をもって活動できる場をつくり、住居周辺で行っている活動を広く周知させて入会を促す。

〔まとめ〕

会議の中で高齢者の孤立化は、特に男性が多く、60代ぐらいで余生を考えた地域のふれあいを考えていく良い機会であった。必ず訪れる高齢社会に対応した人生設計を推進すればよいと感じた。行政への要望としては、高齢者外出支援の集会に特化したチケットの配布や高齢者同士の声掛けで、移動や買い物までできる施策の構築などがあった。

【意見交換の結果の取り扱い方針】

各班の意見交換会の結果について、委員会で調査・議論を行い、市政への反映に向けて検討していく。